

ターニングポイントは、 一歩踏み出した先にある

挑戦しなければ失敗はありませんが、成功もありません。

研究は、最初からうまくいくことの方が少なく、失敗の原因を考え、次の方法を試すことの繰り返しです。挑戦と失敗を積み重ねた先に、成功をつかむことができます。失敗は成功の反対ではなく、成功に近づくための大切な過程だと考えています。

また、環境が大きく変わるときには、不安や迷いがつきものです。そのようなときは、周囲の評価や目先の条件だけで判断するのではなく、自分が何を大切にしたいのか、その選択を後から振り返ったときに納得できるかを考えるようにしています。そして、岐路に立ったときには、できるだけ前向きに考え、「今しかできないことは何か」を判断基準の1つにしています。

材料物質科学コース 准教授

原 先生

はらみつお
2001/4～2005/3(4年間)名古屋大学工学部化学・生物工学科
2005/4～2007/3(2年間)名古屋大学工学研究科物質制御工学専攻博士前期課程
2007/4～2009/3(2年間)富士フイルム株式会社
2009/4～2012/3(3年間)名古屋大学工学研究科物質制御工学専攻博士後期課程
2010/4～2012/3(2年間)日本学術振興会特別研究員DC2
2012/4～2017/3(5年間)名古屋大学大学院工学研究科物質制御工学専攻助教
2017/4～2024/3(7年間)名古屋大学大学院工学研究科有機・高分子化学専攻助教
2023/11～ 株式会社ニッシリ技術アドバイザー(兼務)
2024/4～2026/3(2年間)名古屋大学大学院工学研究科客員准教授
2024/4～ 香川大学へ
2025/5～ 文部科学省科学技術・学術政策研究所(NISTEP)専門調査員(兼務)



教員紹介



研究室紹介

研究室卒業後の主な就職先

株式会社ダイセル
テイカ株式会社
根上工業株式会社

周囲から頼まれることが多く、
人を支えたり、物事をまとめたりする
役割が自分には向いている
のかもしれない

学生時代は、どちらかといえばリーダー役を担うことが多かったと思います。サークルの代表を務めたり、友人とイベントを企画したりする中で、自然と周囲をまとめる立場になりました。自分と同じ考えの人ばかりではない中で、意見を調整することや、相手の立場に立って考えることの大切さを学びました。この経験は、現在、学生と接するときや研究室を運営するときにも活かしていると感じます。

大学・大学院時代は、家族よりも長い時間を研究室メンバーと過ごしながら、実験や議論に取り組んでいました。研究は失敗することの方が多く、当時は大変に感じることもありましたが、今となってはその失敗も含めて良い思い出です。地道ではありますが、トライ&エラーを繰り返しながら、目的とする化合物の合成に成功したり、期待していたデータが得られたりしたときの達成感は、今でもよく覚えています。

民間企業を辞めて、大学に 戻ったことがターニングポイント

企業で働く中で、大学で行われている研究が社会とどのように繋がっているかを実感しました。一方で、もう一度大学で研究に向き合いたいという思いも強くなりました。そのとき、「今しかできない挑戦かもしれない」と考えたことが、大学に戻る決断を後押ししました。博士後期課程に進学すると、研究室に同じ立場の学生は少なく、自然と研究室を越えた交流や、学外の方々との関わりが増えました。その結果、自分のコミュニティが広がっただけでなく、多様な価値観に触れ、自分自身の視野も大きく広がりました。この点でも、大学に戻ったことは自分にとって大きな分岐点だったと感じています。大きな進路変更には不安もありましたが、家族や友人が理解し、支えてくれたことはとても大きな力になりました。自分一人では決断しきれなかった部分もあり、周囲の支えがあったからこそ、前向きに新しい道へ進むことができました。

次のターニングポイントは、研究室として生み出した成果を、社会に還元できたときかもしれません。現在取り組んでいる研究がさらに発展し、共同研究や社会実装に繋がっていくことがあれば、自分自身の研究者としての役割も変わっていくと思います。また、学生や若い研究者を育てる立場として、研究室をどのように発展させていくかも、今後の大きなテーマだと感じています。



01



02



03

01 夏祭りに、部署メンバーで焼きそば屋台を出店(富士フイルム勤務)
02 研究室で、タコ焼き作り(大学院生)
03 研究室の学生とリレーマラソン大会に参加(教員初期)

讃岐の風景をつくる



木と、ともに。



本 社：三豊市仁尾町に尾幸 15-1
高 松：高松市郷東町 23-7

